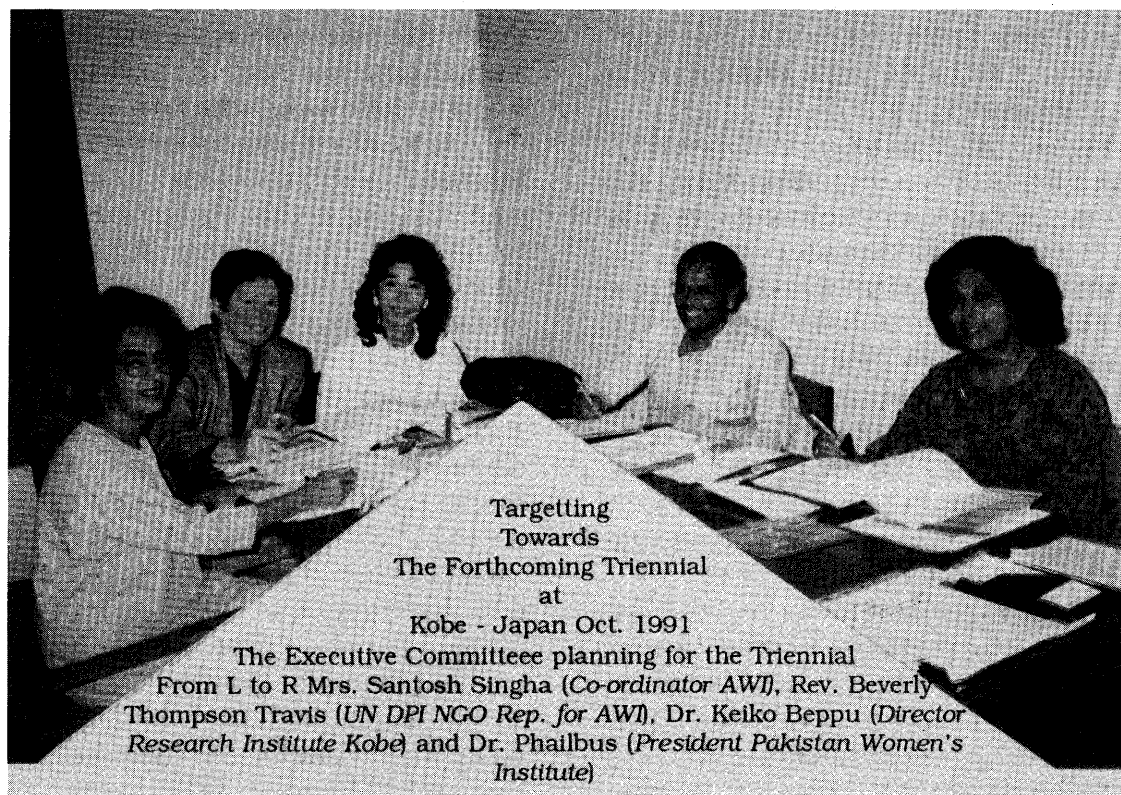


NO. 10
March '91

NewsLetter

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート



Targetting
Towards
The Forthcoming Triennial
at
Kobe - Japan Oct. 1991
The Executive Committee planning for the Triennial
From L to R Mrs. Santosh Singha (Co-ordinator AWI), Rev. Beverly
Thompson Travis (UN DPI NGO Rep. for AWI), Dr. Keiko Beppu (Director
Research Institute Kobe) and Dr. Phailbus (President Pakistan Women's
Institute)

(Asian Woman Vol 16 NO. 49 Jan. 1991 より転載)

「ここが天国なの？」—— Coe College でのAWI 執行委員会に出席して——

別府 恵子

地球温暖化が進むなか昨夏の猛暑はまた格別だった。丁度イラクのクウェート侵攻直後の8月3日(日本時間)、アイオワ州シーダ・ラピッズ(Cedar Rapids)にあるコー・カレッジ(Coe College)で開催のAWI(The Asian Women's Institute)執行委員会に廣澤女性学インスティテュート・ディレクターにかわって出席するため、猛暑の大阪を発った。乗継ぎのミネアポリス空港で小一時間、夏のあらし(ミニ・トーネイド)の通過を待って、午後9時40分といっても当地は夏時間のこと、夕立後の空がまだ明るいシーダ・ラピッズに到着した。空港では、すでに到着されていた一部の執行委員会の面々が「ここが天国なの!」("This is heaven!") といって私を出迎え

て下さった。この挨拶「ここが天国なの?」は会議中いくどなく口にされ、私たちのパスワードとして会議進行の円滑油の働きをしてくれたのである。

すこし説明をつけ加えると、この「天国」というのは、昨年放映されたアメリカ映画 *The Field of Dreams* の舞台となったアイオワ州の中小都市シーダ・ラピッズのことを指しているらしい。アメリカといえば、ロサンゼルスやニューヨークなどハイテク文明を現出する大都市がすぐ連想されるだろう。しかし、その空港にタクシーがないという信じられないようなアメリカの都市、ひと昔まえのアメリカ中西部の「田舎町」を彷彿とさせるのが、8月4日から7日まで会議の会場となったコー・カレッジが所在するアイオワ州シーダ・ラピッズ、「天国」、なのであった。したがって、ホステス役のコー・カレッジのチャブレン、トンプソン=トラヴィス女史はタクシーの運転手さながら空港と会場を、私たちの送迎のために

くどとなく往復されることになったのである。

休暇中で学生は寮を出はらってキャンパスは静穏平和のもの、そのうえ気温も猛暑の大阪が遠い国のように感じられる心地のよさ。アジア諸国（インド、パキスタン、日本）から参加した私たちにとってシーダ・ラビッツは、まさにノスタルジアと少々の皮肉をこめての「ここが天国なの？」であった。

翌8月4日の朝、今度は私を含めたメンバー全員で、AWI会長のインドラニ・マイケル女史を空港に出迎えた。今から思えば昨年8月イラク政府がイラク在住の外国人を人質に取った事件で湾岸戦争はすでに始まっていたのである。中東における緊急事態の発生で起きた航空便欠航のため、フランクフルト経由で予定より遅れて「天国」に到着されたマイケル女史を迎えて、AWI執行委員会は同日予定どおり開始された。

連日、昼食をはさんで午前と午後のセッションがもたれた。AWIの事業・活動報告、会計報告、機関誌 *Asian Woman* の編集企画がAWIインターナショナル・オフィスのシンハー女史から理路整然と上程され、活発な質疑応答がなされた。本学がAWIに加盟して6年になるが、このたびその執行委員会にオブザーバーとして出席して、AWIの理念や活動をより具体的に把握できたことは貴重な収穫だった。また、これは1986年タイのチェンマイで開催された「アジア女性学セミナー」の折りにも経験したことだが、毎回討議に先だってリーダーが聖書を読みその箇所について瞑想をする、そしてそれが自然発生的に祈りに移行していくという各セッション開会の「儀式」が印象的であった。それは、人類の平和と共生という「天国」を目指す道程の入口としてきわめて象徴的な「儀式」なのである。

さて、このたびAWI本部がAWI執行委員会にオブザーバーとして本学からの出席を要請してきたのは、AWIのTriennial Conference（三年毎に行われるAWI加盟校の学長会議と教育会議）の主催校という大役を本学が引き受けることになったからである。AWI会議の主催を引き受けるについては、この二、三年来、本学女性学インスティテュートの運営委員会での協議、総会の決議を経て、さらに大学教授会の（1990年10月26日報告）ご了解のもと、慎重に審議を重ねてきたのである。コー・カレッジでのAWI執行委員会では本学が会議主催校として計上できる運営資金総額、宿泊設備などの条件を理解してもらった上で、今回のAWI Triennial Conferenceを1991年9月30日から10月5日まで関西学院千刈セミナーハウスで開催することが確定したのだった。

AWI Kobe会議のテーマは、“Women and the En-

vironment in an Age of Technology” 「テクノロジー時代における女性と環境」という時宜をえた、また切実な課題である。高度に発達したテクノロジー文明がもたらした様々な公害——オゾン層の破壊に因る地球温暖化、熱帯雨林の伐採など資源の乱用に因る地球の砂漠化、工業廃棄物に因る環境汚染などなど。こうした環境問題が学界や企業界、政府や地域社会で取り上げられて久しい。バランスが保たれていた地球の生態系がくずれ地球の砂漠化が進めば、かつてフロストを震寒させた私たちに内在する“desert places”が拡大するのは目にみえて明らかだろう。しかし、テクノロジー文明の恩恵を享受している私たちの意識革命はいま始まったばかり。

環境破壊という課題をまえに、私たちは失われた「天国」回帰へのノスタルジアに浸るだけに甘んじることなく、ひとり一人の意識革命によって正しい意思決定ができるよう若い世代の教育に当たらねばならないという理念が「テクノロジー時代における女性と環境」という命題にこめられている。失われた「天国」への回帰が果たせなくとも、「ここが天国なの！」と自負できるような地球環境を創造していく“privilege”は私たちに与えられているのではなかろうか。

以下はコー・カレッジでの執行委員会で確定したAWI Kobe会議のプログラムである。いま切実な環境問題を考え、そしてアジア諸国における女子高等教育に携わる責任者たちとの情報交換、交流を豊かなものにするため、女性学インスティテュートのメンバーのみならず、広く大学関係者皆様の会議へのご参加とご協力をこの紙面を借りてお願いしたい。（研究所長 英文学科教授）

〈教育会議〉

第一日目 9月30日(月)

- 9:00 a.m. 開会の辞および礼拝
- 10:00 基調講演 (Dr. Vandana Shiva)
"Women and the Environment
in an Age of Technology"
- 11:30 ワークショップ
- 2:00 p.m. セッション
- 3:30 ビデオ上映
- 6:30 歓迎夕食会

第二日目 10月1日(火)

- 9:15 a.m. 講演II (神戸学院大学・川合真一郎教授)
"Women and Biotechnology:
An Ethical Perspective"
- 講演III (Dr. Indrani Michael)
"Environmental Pollution:
Its impact on Women"
- 10:30 ワークショップ
- 11:30 セッション
- 2:00 p.m. ケース・スタディおよびパネルI、II
- 6:30 日本伝統文化の夕べ

第三日目 10月2日(水)

- 9:15 a.m. 講演 (未定)
- 1:30 p.m. 総括および祈禱
- 3:00 閉会

*引き続き、〈学長会議〉が10月3日(木)より5日(土)まで3日間にわたって行われる予定である。

仕事をとおして考えること

志賀 玲子

卒業して6年の月日がすぎた。先日、総合文化学科の科別礼拝に招かれ、学生達にわたしの仕事のことを話す機会を与えられた。

わたしは劇場や演劇、ダンス公演の企画制作（と、いってもなじみのない言葉だと思うのだが）をしている。名刺などの肩書にはプロデューサーなどというカタカナ職名を書くこともある。

舞台芸術の企画、制作という仕事は、5W1H（いうまでもなく、いつ、どこで、だれが、なぜ、なにを、どのように）をきめること、そして実現にむけて各セクションの調整をしていくこと、そして、その公演をひろく知らせていくこと、予算作成などお金の管理などが基本である。

わたしにも卒業後、2年間のいわゆるOL生活がある。大学時代、子供の頃からつづけていたバレエにはすでに限界を感じながら、演劇学校に通ったりしていた。小劇場演劇のメッカであった劇場でアルバイトをしていた。小学校から大学までずっと女子校だったわたしにはとても刺激的で興味深々の人達にたくさん出会った。4回生になる頃には、劇場か、文化関係（その当時は、まるでやりのように文化という言葉が企業がつかいた頃だった）の仕事、それも、クリエイターではなく、制作という仕事をしたいと思っていた。

ただ、そんな仕事は就職活動などでつけるものではなかった。仕事としてする口がなかった。そんな時、大先輩のプロデューサーから「プロデュースの仕事がしたいなら、社会を見てきた方がいい。一度は普通の会社に就職してからでも遅くはない。その方が後々役にたつ。クリエイターと社会をつなぐ仕事なのだから。」といったアドバイスを受けた。そして、たった2年間のOL生活が始まった。

商社の企画部門が独立した会社だった。入社してくる大卒女子はほとんどその企画という言葉に魅力を感じていたと思う。しかし、ここでは完全に男女の職分はきめられていた。女子は事務職である。最初から“腰掛け”（やりたい仕事は別にある、社会勉強のためという意味では…）のつもりであったわたしにそのことを云々する資格はない。ただ、その会社には、新卒入社とは別に専門職としてアパレル関連の仕事を経てきた女性達がたくさん働いていた。彼女達は自分の仕事をもっていた。彼女達を見て、はやくわたしも自分の仕事と感じて働きたいと思った。自分の力を試したいと思った。その為にす

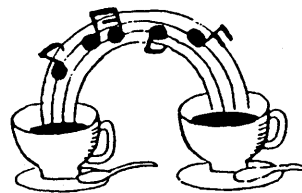
べてのことが勉強だと思える仕事があった。長いように思った短いOL生活もすぎ、念願の仕事 시작했다。4年がたつ。自分の会社をもったため、OL時代には「どうしてこんなことを…」と思った事務的な仕事や総務・経理的な仕事は何倍にもふくれあがった。そして、あのOL時代に覚えた経理の知識が思わぬところで役にたっている。

今の仕事には男女差別などというものはない。良い仕事のできる人とそうでない人、それだけだ。自分の小ささ、未熟さを思いしらされることばかりだ。いつも人間性が問われているように思う。必要な知識やテクニックはある。しかし、人間相手に交渉したり、調整したりといったことが一番多く、大切な仕事だから、同じ仕事でも誰が言うか、どんな風に言うのかによって結果が全く逆になることさえある。到らなさに歯ぎしりしたくなることも度々だ。

大きな組織に属していないことの有利さと不利さも味わう。強制されることはないけれど、強制されるがゆえに学ぶといったこともない。色々な人と出会うチャンスは多いけれど、バックボーンのために続く関係というものは、会ってだけの魅力がわたしにあるかどうかを試される。自由に行動できるけれど、守ってくれる組織はない。自由というのはけっこうキツイものだ。

仕事の話をしていると、「結婚しないんですか？」と聞かれることがよくある。なるようにしかならないと思っているので、そんな風に答えると、相手はたいがい納得したようなしなやかな顔をする。どんな答えを期待されているのだろうか。女性の自由と平等ということ、女性の自己実現ということは今あまり考えていないように思う。ただ、今は直面していないだけで、子供をもった時、そして、仕事も続けたいと思った時などは身にしみて感じることだろう。女性学インスティテュートのこの紙面にふさわしいことをわたしは日頃あまり考えていないような気がして、少し反省した。

(演劇・ダンス プロデューサー、卒業生 I 102)



「女たちよ」

八代 秀夫

アントニア・プリコが有名なカール・ムックに“指揮を教えて”と頼んだ時、彼はすぐ断った。何故なら、1920年代では女性指揮者は風変わりな存在であり、多くの男性のみからなる楽員にとっては、女性がオーケストラの指揮をする能力を疑っていたからである。しかしそれが70年後の1991年現在どれほど変わったであろうか。

プロ野球のオーナーが経営する、ある日本の職業オーケストラのメンバーはハーブを除いて全部男性である。オーケストラはプロ野球でも相撲でもないし、まして男性だけの聖域ではありえない。

実際に演奏能力だけで採用した別のオーケストラのヴァイオリンのセクションでは大部分が女性で、男性は数えるほどしかいない。

ピアノまで含めると音楽を職業とし、それを勉強している男性の数は極端に少なくなる。

このような現象は音楽の世界ばかりでなく、多くの男女共学の大学の英文科でもまた同様である。

一体何を述べたいのかと言うと、芸術の世界、特にクリエイティヴなジャンルに性差を持ち込むなと言うことである。

キリスト教は18世紀のバッハの時代ですら、教会の合唱席で女性が歌うことを禁じていた。

741年教皇ザカリアは尼僧院長によるミサの挙行を禁じたし、ヒエロニムスは【神の娘は音楽に対してはつんばでなければならない。彼女らは何故フルートやリラやキタラが作られるか知らなくても良い。】と書いている。

様々な女性に対する音楽の制限が続いて来た西欧の社会機構は、それに束縛されない非西欧の社会から見るとナンセンスである。

何故女性は自分の感情を表現するのに、持って生まれた音楽の才能を使おうとしないのか。演奏では一流の技術を持っているのに、女性が作曲したものを取り上げない。専ら男性による作品を演奏することで満足しているのか。

サッフォーとその女生徒たちはしばしば愛や結婚の歌を書き、音楽を捧げた。そしてその音楽は同時代の人々にとって完璧なものとされていたのである。言いっぱなしで反論が伺えぬのがチョッピリ残念である。

(音楽学部教授)

「男たちよ、女たちよ」

杉 瀬 祐

“あなたがたはくりかえし聞くがよい、
しかし悟ってはならない。

あなたがたはくりかえし見るがよい、
しかしわかってはならない。”(イザヤ書6:9)

この謎めいた不思議なことばは、預言者に告げられる神の啓示の被覆性と成就の必然性の両面を示しているのだが、もっと卑近な例で考えれば、例えば恋人、夫婦、親子などの関係の中で、繰返し繰返し相手に聞け、相手を見よ、しかしもう判ったと思ひ込んではいならない。あいつの言うことや考えていることなんか、顔を見なくても始めからわかっている、というのはその人の解釈であり、観念である。だがそれはいけないうことだ。活きた人格的相手に対してはどこまでも繰返し聞け、相手を見よ。そう考えるともっと身近にこの聖句が理解できるであろう。観念的に理解した神は死せる神でしかない。

周知のように、「知る」ということばは聖書の中では人格的接触や性交を意味している[“アダムはエバを知った、そしてカインが生れた”(創4:1)、“ヨセフはイエスが生まれるまでマリヤを知らなかった”(マタイ1:25)]。それはギリシア的知とは本質的に異なっている。人格的に知ることと観念的に知ることとは違う。

相談に来た学生に何故〇〇先生に相談しないのかと尋ねると〇〇先生はお忙しそうなので、と言う。学校でも家庭でも忙しすぎてギリシアの知だけが横行して人格的知が欠落してしまつたらおそろしい。スコレー(暇)や安息を神聖なものとしよう。男とは、女とは、といった観念的断定は慎しみたいものである。

O. F. ボルノーやH. ヴァン・ダイクなどによれば、「遊び」の本質の中には“偶然性や不確実性と戯れ”ということがある。下手なくせに釣りが好きだが、季節・天候・潮流 etc. 百回行ってもその都度諸条件は違う。その不確かさと自分の経験と技術の戯れが「遊び」の楽しさだと思う。パチンコやボーリングなどと釣りの本質的な違いもそこにある。100%偶然性が支配するとか、100%技術が支配するところには本当の「遊び」はない。人生としなやかに遊び戯れる心も欲しいと思う。

男と女、老人と若者、強者と弱者、が人間としてしなやかに触れ交わる世界を育てよう。

(特任教授)